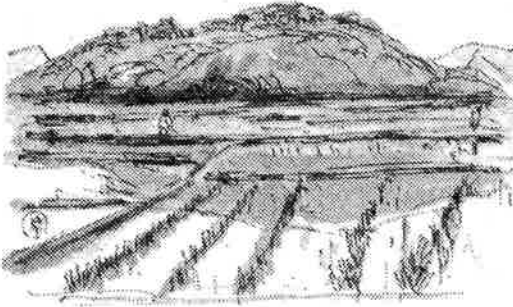


城山

(二)



鶴岡から見た城山

文

史談会員分担執筆

題字

白井龍峯

(賛助会員・佐伯市城下西町)

挿絵

工藤幸夫

(佐伯市大平区)

この文は、大分合同新聞社佐伯支局の要請により佐伯史談会員が分担執筆、昭和五十六年八月五日より五十九回にわたり、同紙に連載されて好評を博したものである。

新聞連載にあたり、紙面の制約により、書きたりない不十分なところもあるが、はじめて「城山」を総合的にとらえたものとして、興味深いものである。目に触れる機会のなかった会員のため、新聞社のご好意により題字・さし絵もそのまゝに掲載する。

城山の誕生

矢野 弥生

(佐伯市中山区)

太古は海底だった

昭和五十二年一月二十九日付の大分合同新聞に、注目される興味深い記事が出ていた。

「本匠村山中部にある佩楯(はいたて)山(標高七五四呎)の山頂近くの地下から、このほどブルドーザーで林道建設をしていた村役場産業課職員田中正喜さん(二十八)が、硬い岩石にいだかれた大きな貝の化石を掘り出した。『高さ七百五十呎以上もある山の頂上付近から貝の化石が見つかるなんて…』と田中さんはじめ村役場職員らもびっくり(中略)。化石が見つかったのは佩楯山の八合目付近の雑木林。ブルドーザーが地下三呎ほどのところから掘り出した。縦十五呎の大きさ。殻には縦に数本の筋が入っていることから、学名『オキシトーマ』と呼ばれる二枚貝とみられる。この貝を包む盤は粘土

が固まって出来た水成岩の中でも、硬質のけつがん(頁岩)らしい(後略)」

また、昭和四十八年一月には、大分市内の中学生が本匠村佩楯山でウニの新種の化石(中生代白亜紀前期Ⅱ一億二、三千万年前)を発見している。

海から三十キロも離れた本匠村の佩楯山からウニや貝の化石が発見されたことは、太古はこの地方も海底だったのである。佐伯の城山をつくっている地層は、いまから約一億年くらい前の中生代に海底にたい積したものである。海底にあった佐伯、南海部郡地方も、中生代から新生代第三紀にかけての地殻の変動時代に入ると海底から顔を出し、陸地が生まれた。

たぶん第三紀(二百万年―六千五百万年前)のある時期に海から生まれたこの地方の山々も、長い間の浸食作用で山地は削られて平野になり、海底に沈んでいた一部も、その後の隆起で現在の高度に達したものとされる。城山もその時期にできた残丘(浸食にとり残された丘陵)らしい。

地形・地質

矢野 弥生

周辺の山地から孤立

市街地に隣接し、城址公園として佐伯市民に広く親しまれてきた城山は、標高一四四呎、周囲三^キほどの小さい丘陵である。周辺の山地から孤立した峰で、番匠川の左岸にある。西側の鶴岡小学校付近からながめた山の姿は台形で、山頂あたりは牛の背のように伸びている。

江戸期の佐伯城は別名を「鶴屋城」といい、また「鶴ヶ城」ともいった。名前の由来は一説には城山の形が「舞い鶴（ツル）」に似ているからといわれる。が、実際の山容はどの方向から見ても「舞い鶴」といった感じはしない。どちらかというところ、市街地の南側を流れる番匠川右岸の久部あたりから遠望すると、尾根の末端が段丘状に下方へ突き出ている、カメの形に似ている。また、航空写真を見ると、城山は緑に覆われた丸い古墳のようである。



佐伯城「二の丸」廊下橋跡

標高一〇〇呎くらいから上は、比較的ゆるやかな地形だが、山腹の斜面は三〇―四〇度の傾斜があつてかなり急である。谷川が東側に二つ、南と西側に一つずつあるが、水量は少なく、雨期のほかは伏流している。頂上付近は平らで、城址の石がきが残っており、全山ゴジイ、カンなどの常緑広葉樹の自然林に覆われている。

城山の地層は前回の「誕生」でも少し触れたように、現在のところまだ化石は発見されておらず、詳しい時代は不明である。約一億年前の中生代に海底にたい積した地層と推定され、四国南部の四万十（しまんと）地帯と同じ地層である。岩石

は水成岩で、特に砂岩や頁岩（けつがん）が多い。学説によると、県中以北は新生代の火成岩、県南部は古生層と中生層で古く、水成岩が多い。佐伯、県南部地方はほぼ津井―木浦構造線（土地の大きな裂け目）以南にあり、時代未詳の中生層からできている。

気 候

矢 野 弥 生

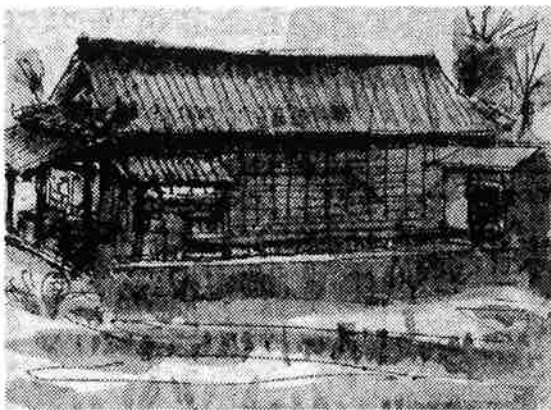
北東・東斜面が多雨

佐伯地方の人々の人柄が、穏やかで豊かなのは、恵まれた温暖な気候のせいであるという。その真偽はともかく、そういわれるほど佐伯地方の気候は、県内ではもっとも温和である。

気候型からいうと南海型（和歌山、徳島、高知、宮崎、鹿児島）の諸県で、沖繩を除いては、わが国では最も温暖な気候区）に入る。この気候区では、北側を北東から西に走っている山地が、冬の季節風を防ぐので、よく晴れた天気恵まれて暖かい。佐伯地方は年平均気温一

六度台で暖かく、年間降水量は二〇〇ミを超えて雨量が多い。五、六、七、八、九月に多雨で、十月から翌年四月上旬までは雨が少ない。また夏の佐伯は、平均二五度以上の高温期間が、大分市に比べて二週間ほど長いようである。温暖な気候を反映して、標高一四四呎の城山はスタシイ、コジイなどの常緑樹の自然林がよく生育している。

城山には正規の気象観測所がないので、長期にわたる気象資料もないが、昭和五十二年に西田実（中学校教諭）、川西博（大分大教授）両氏によって城山の気象が観測された。



三の丸御殿を北側より見る

その報告書（大分県自然環境保全地域候補調査報告書・
県南地区の森林微気候・昭和五十三年）を基に紹介しよ
う。

まず城山の雨量状況から説明すると、観測した場所によ
って差異が認められる。城山の北東斜面と東斜面は、
南斜面や西斜面に比べて雨量が多い傾向にある。この理
由は、佐伯地方では降水原因が低気圧性降雨のときには、
佐伯湾からの東よりの風（海風）が、城山の東斜面に吹
きつけるためではないかと考えられる。

城山の日射量については、森林内四カ所と林外の城山
頂上二カ所で測定されているが、樹冠による日射の透過
率は一多強であり、樹冠密度は高いという。これは城山
の自然林が繁茂していることを物語っている。

西斜面で湿度が高い

気温を中心に城山の微気候の特徴を紹介しよう。今回
も川西博（大分大教授）、西田実（中学校教諭）両氏が
昭和五十二年に観測した資料によって説明する。

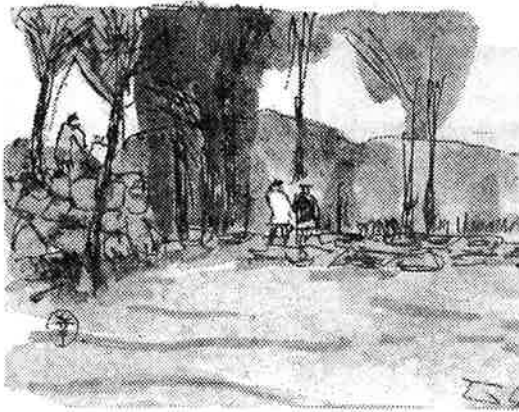
最低、最高気温についてみると、観測地点の違いによ

る差異は少ない。しかし九十一月にかけ、最高気温で
は城山の北東斜面と西斜面は、東斜面や南斜面に比べて
約一度ほど低くなっている。市街地の気温とでは城山は
最高気温で約二度低く、最低気温で約一度低い。

また、城山の東ふもとにある佐伯小学校は城山と市街
地に囲まれているため、特に最高気温が高い。市街地で
も消防署は中心部から離れ、裏を番匠川分流の中川が流
れ、佐伯湾か
ら一キロ近い
距離にあり日
中は海風を受
けやすいので、
佐伯小学校よ
りも気温が低
い。

森林気候に
ついては、い
くつかの興味
深い事実が報
告されている。

森林気候に
ついては、い
くつかの興味
深い事実が報
告されている。



城山山頂の本丸跡

まとめると①城山は佐伯湾に近く、独立した峰で、海陸風の影響を受けることが多い②西斜面では下降風がみられ、湿度が他の斜面よりも著しく高い③城山の気温は市街地の暖かい空気の影響を強く受けて最高、最低気温が一―二度押し上げられていると推定される。これは裏より風（海風）が市街地で暖められて上昇後、城山の斜面に吹きつけるためではないかと考えられる④将来、佐伯市の都市化が進むと、それに隣接した城山の森林の環境は大きな影響を受けることが予測される―などが指摘されている。

佐伯市民にとって、市の発展は大きく願うところである。と同時に、多くの市民が、こよなく愛する城山の自然も、また大切に望んでいる。押し寄せる時代の波は、どうしようもないが、これに対する市の対応が期待される。

表紙解説

浜木綿咲き匂う江武戸浜

蒲江町畑野浦

この浜辺はもとは暖竹（暖地の海岸付近に自生）の竹藪に覆われていた。村おこし運動を進めている畑野浦の人々は、ここを公園化して憩いの場にすることを考え、延々と続き繁茂する暖竹と野ばらにいだんだ。先ず有志の人々による暖竹切りからはじまった。案ずるよりうむが易いのだとえ、日がたつにつれ二人三人とふえて行った。最も困難な株掘りにはブルドーザーの応援が来た。

漁協は経済的な援助を買って出た。あたりの整地が進むにつれて荒れた社殿がみすぼらしく見えて来た。入津湾漁民の信仰する江武戸神社は漁協によって新築された。やがて数万個の浜木綿の種が町内各地から採集され、小学生から高校生を含む区民総出でまきつけられた。

更にフェニックス、海紅豆（かいこうず）、夾竹桃、芝生も植付られミニ子供の国ができた。

六月になると浜木綿は白く咲き匂い、海紅豆、夾竹桃は赤く、また紅に夏を彩る。よい海水浴場でもある。